

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

ホームページ

<http://shakatsushin.cool.coocan.jp/>

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakatsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話/FAX(03)3299-5367
振替 0010019158431 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 (郵送) 350円・メール 175円

6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

二〇一六年を展望する

相田 邦夫……2

『小さな花』の「お菜洗い」

中澤 秀行……3

— 信州松本と岩井章さん (下) —

国鉄闘争の想い出と

菅原須摩子さんの存在

山下 俊幸……6

イスラム国 (IS) 消滅、中東世界の次は？

滝野 忠……8

読者からのおたより……

11

旬刊 社会通信

NO. 1208

二〇一六年一月一五日号

二〇一六年一月一五日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

原子炉の底が抜け落ちて以来、政治・経済・行政も底なし沼深く沈み込む春。新潟県三条市から『楽農楽読通信二〇一六年新年号』をお届けします。

底抜け国政 その一は、野党が指摘した「戦争法」でしょう。米国の言いなりの戦時体制づくり「アベ政治を許さない」と国会前や全国津浦浦で響いた。多くの命と引き替えて得た憲法九条を簡単に捨てるわけにいかない怒りの声。

その二は、沖縄県や市を飛び超えて直接住民組織の区に金をばら蒔く政府。

その三は、福島第一原発の放射性物質の垂れ流しが続いていることでしょう。原発事故被害者『相双の会』会長の国分さんは「したくともできない帰還」と毎月の会報で訴える。

底抜け市政 その一は、藤田某県議。市議時代に国保税を納税しないで差押えまで食らった人物が開きなおって未だに県議だ。その二は、野崎某市議。書類送検、罰金十万円で宅地建物取引業の免許を取り消されたが市議を続ける。その三は、一体校のプールの不具合、牛乳問題。その四は三条小廃止、裏館小への吸収統合。

その五、市・保内工業団地に木質バイオマス発電所・チップ工場建設問題でしょう。ここでも住民の声より市長の声が優先の市政が続く。アベは米国・シリコンバレーまで行って地方に「燻っている」中小企業と言う。国定市長もそんな感覚なのだろうか。

借金大国 市の借金、十年前は五百億円余（合併前）。今、倍の一千百億円余。国全体では一兆円を超える。年金生活者の元手百四〇兆円の内、五〇％が株式投資にまわされ、大穴がでたというのに国会も開かず、アベは相変らずの外遊詣で。

大企業の内部留保二五四兆円で減税。タンス預金が三〇兆円というがどこに誰が持っているのか。庶民の生活と懸け離れた天文学的借金漬け政治を変える選挙が近づいて。ここで一発強烈なノックアウトパンチを与える春の到来だ。

ベトナムへの旅 五年前に続き、二回目の旅。今回は、四十年以上前、米軍がベトナムに上陸したダナン泊まりで古都・フエ、ホイアン旧市内、ミーソン遺跡の世界遺産づくし。道中の道路拡張整備、住宅建設、長大トンネル等めざましいインフラ整備。この五年で人口一千万人増。米国との戦争勝利四十年の勢いは若さに満ちあふれている。人口一億人突破はこの先数年で達するであろう。

あとがき 「まやかし」の市政が続く、まとまな市の幹部職員が育つのかと疑問を持つ市民。国定市長や橋本、安倍の政治を通してみると「地方創生」も「一億総活躍社会」もいかに「まやかし」の社会かがはつきりしてくる。五十年來の古い友人が、次のような賀状をくれた。

「日本が過去の戦争の反省の道から大きく離れ、戦争前のあの昭和初期の政治経済情勢に戻ってきたと思われる年明けになりました。地域で交わる、根からの自民党支

持者であられる方は『今の政府は怖い、だれかこれを止められないでしょうか。』とおっしゃる方がほとんどでした。保守も革新もなく、今、一緒になって、今の政治の流れを止めなければ、と胸に迫る思いでお聴きました。「残りの人生を護憲のために捧げたい。精一杯がんばりたい」と。

「残りの人生を護憲のために捧げる」、決意新たに、今年の展望を切り拓きたい。畑仕事も二〇年。昨夏は日照りで実り多い年だった。作物は手をかけただけ正直に育つ。『まやかしの教育』本、残僅少、ご購入を！

定価一二〇〇円（税込み）。お問い合わせ・お申し込みは、相田（090-1466-5600）

（三条市・相田 邦夫）

『小さな花』の「お菜洗い」

― 信州松本と岩井章さん（下） ―

岩井章少年の作文「『小さな花』第二十三号の「お菜洗い」

学生の頃、県外の友人に信州のイメージを聞いてみたら「漬物、蕎麦、味噌」と言われたことがあります。今も昔も師走に入りますと、信州を代表する漬物である「野沢菜漬け」のシーズンです。多くの家庭が各家庭の方法でこの野沢菜を漬けます。

私は毎年「野沢菜漬け」の季節になると、「岩井の爺さん」である岩井章さんのことを思い出します。岩井さん自身も郷里松本を想う時には、「野沢菜漬け」をする母上きくさんのことを思い出していたに違いありません。岩井さんとの思い出の一つとして、この機会に紹介させていただきたいと思えます。

岩井章さんは、松本市白板一三七番地にて父岩井朋治、母きくの長男として、大正十一年四月二十五日に生まれました。少年時代を過ごした信州松本での原体験が、岩井さんの生き方に多くの影響を与えたことについては、前出の『岩井章 ひとすじの道50年』や『されど節を屈せず 戦後史とともに・岩井章物語』を読んでいただければと思えます。以下は、その補足です。

岩井さんは、季刊のローカル誌『信州の旅 1985年秋号』に「わたしのふるさと松本」という一文を寄稿されています。先ず、その前半部分を紹介させていただきます。

ちなみに、向坂逸郎先生もこの季刊誌の『1973年冬号』と『1975年冬号』に寄稿されていますし、編集長の故藤田靖夫さんは、向坂先生に原稿を依頼した時のことを『1985年春号』に記されています。

『私のふるさと松本』 ― 岩井 章

遠くにおいて故郷を思う時、初恋に似た甘ずっぱい感じでいっぱいになる。松本市内を包むようにはるか西の方には、日本アルプスの山々が峻険を連ね、東側にはかぶさるひさしのように袴腰、王ヶ鼻がみえている。市の真ん中には天守閣がどっしり座っている。

私は、尋常小学校四年まで開智部に通ったが、その後、田川部に移った。町の中心部に住んでいた両親が市のはずれの白板に移ったのである。

ここは田川のすぐそばだった。父親は少しばかりの土地を借りて野菜を作っていたが、それだけでは食っていけず「ひよとり」にでていた。様々な雑用をやる日雇い仕事である。母親は病人の付き添いとか商家の家事手伝いなどをして働いていた。こんな貧乏ぐらしだったが、私は余り気にもせず伸び伸びと育ち、近所のがき大将だった。

今年、「郷土出版社」が復刻した『小さな花』と題する綴り方集に私の尋常四年生の稚い作文が載っている。きれいな湧水で野沢菜を洗う母親の姿をかけたものである。私は自分で言うのもおかしいが、小学校、尋常科、高等科を通じて四年生の時だけ四番になったが、ほかは一番だったと記憶する。良い先生に恵まれたが、私自身もかなり勉強したと思う。白板から清水部（高等科）まで通うのにはかなりの距離だったが、（多分五キロくらいあったと思う）素足に下駄をはいて六九・縄手・横田などを横切って通学した。（以下略）

【中澤（注）】実際は松本小学校田川部校の尋常科五年生時の作文です。私は『小さな花』の復刻に尽力した故有賀積男先生には小学校の頃からお世話になっていました。先生は松本市立清水中学校長を経て、重要文化財開智学校で明治以来の教科書の研究や整理をされた私の大切な恩師の一人です。『小さな花』は、大正十年の創刊以来、昭和十年発行の第二十四号まで十四年間にわたって、長野県松本市小学校が編集発行した児童読物、綴り方の詩文集です。大正デモクラシーの後期から昭和恐慌を経て、日本が軍国主義化して行く時期に編まれました。

松本市は明治二十五年から昭和九年度まで、全市一校制を採っていて校長は一人、そして市内各地域に〇〇部校を設置するという中央集権的な義務教育制度をとっていました。松本小学校には開智部（現在の重要文化財開智学校）他計七つの尋常科、そして高等科として清水部があり、岩井少年は尋常科四年途中まで開智部、その後五年生の時は田川部、高等科は清水部に通いました。また『小さな花』は、市内全てのクラスから一点が選ばれて掲載されるというシステムになっていたようで、「お菜洗い」はこうして掲載されました。

私の友人の父親には、岩井さんと小学校の同級生という方がいます。岩井さんは本当に勉強もでき、体格も立派で体育にも優れ、文武両道を絵に描いたような小学生で、クラスのリーダーだったという事です。ご本人も「田川小学校の受持ちに茅野先生という人がいる。大田薫さんがその茅野先生に会った時『あいつはすごかった』といわれたそうだ。そのころは通知表に一番、二番と席次が書いてあったが、三年か四年の時、行儀が悪いということで四番になったことがある。だから、いつも総代といって、クラス代表、学年代表で卒業式の送辞を読んだり、答辞を読んだりした。

そのの上体格がよく体力があったからガキ大将でもありました。」「『されど節を屈せず』戦後史とともに・岩井章物語』（坂本守著／労大新書 16 P）と述べています。【

では、『小さな花』掲載されている「野沢菜を洗う母親の姿を描いた」内容の作文につきまして、全文を紹介させていただきます。原文は旧字旧かなで漢字にはルビが

ふられていますが、新字旧かなでルビなしにて記載しますのでご承知ください。

お菜洗ひ ― (尋五) 岩井 章

授業が終るとあわただしく飛び帰り、かばんを投げ出して、松嶋橋の方へ飛んで行った。

朝出がけに母が、「帰つて来てもゐないかも分からないよ。」「どうして」「あの、お菜洗ひに松嶋橋の出水へ行くから」と言った。

やさしい母の顔を思い浮かべ乍ら、あへるのが楽しみに橋の上をすとすと駆け出した。

「ああ疲れた。あのよしやぶの蔭にきつと洗っていらつしやるだらう。」よしもう一飛びだと、がんばりをくれて駆け出した。すとすと橋にひびく音が秋晴れの空に心地よく聞こえた。

「お寒い」と首をしかめて、お菜洗ひの女衆達が車をやっかいそうにひいて行つた。

待ち受けて見て行くと、なつかしい母の姿が川岸に見えた。「ああ母ちゃんだ。母ちゃん来たね」と呼びかけると、母はさも驚いた様にふりかえつて笑った。又一元氣出して、黄色い雑草の生い茂つた土手を一散に下つた。

しめりを帯びた川岸の砂の上に、洗われた菜が午後の日を受けて光っていた。

「母ちゃん手伝うかい」「いいよ手にひびがされるから」と母の暖かい言葉に深く感じ入つた。ざぶざぶと菜洗う音が冷たそうに、水の上を絶えず流れて行つた。僕は少し手伝つて車の荷作りの用意をし出した。

母の真赤な手を見ると苦勞さがわかる、きいきいと車が異様な音を立てて動き出した。山の様に高く積まれたお菜を見て、一年中にこんなに食べるのかしらと驚き乍ら、重い荷を一生懸命挽いて家に向かった。

【『小さい花』第二十三号（昭和九年二月二十五日発行／発行者 松本小学校／印刷所 信濃毎日新聞松本支局）】より

終わりに ― 資本に媚びない岩井さんが契めた二冊の本 ―

『小さい花』第二十三号は昭和九年二月の発行ですから、時代を反映して「兵隊さんを送りに」とか「兵隊さん」「兵隊さんのお帰り」「入営兵の宿」といった題名の作品も掲載されています。

いわゆる軍国化して行く日本を反映していると思います。そうした状況を踏まえて、働く母親の姿と母を手伝おうとする「お菜洗ひ」の内容に注目してほしく思います。

「いま考るとかなり重症の貧乏だった」という岩井少年が、家庭を助けようとする気持ちと様子が伝わってきます。

貧乏な環境に生まれ育ち、しかし成績優秀な岩井章少年に対して、学費を出すからと旧制松本中学（現松本深志高校）への進学を奨めてくれた人、すなわちスポンサーも現れたと言うのですが、断つたというのです。

小学校卒業後三重県で女工として働くこと二年、心臓病と肺結核で病死した姉のことが、こうさせたようです。「三つ子の魂百まで」と言いますが、金持ちの「資本家」、「資本」に対する生涯変わらぬ気持ち芽生え、形成されていたように感じられます。

貧乏を克服するために、立身出世の道を歩む能力を持っていた岩井少年は、社会変革による貧乏の克服への道を何となしに歩み始めたように思うのは、私だけではないでしょう。

岩井さんに「物の見方考え方を養う」ためにと奨められた二冊を紹介します。

『労働者の世界観』（向坂逸郎著／労大新書）

『唯物弁証法読本』（大森義太郎著／社会主義協会復刻版）

（中澤 秀行）

国鉄闘争の想い出と

菅原須摩子さんの存在

菅原須摩子さん

尊敬してやまない菅原須摩子さんが、国労の本部書記局を退職し、郷里の旭川に帰ったのは約二十年ほど前のこと。旭川に帰ってからもたびたび会い現在でも家族ぐるみの付き合いが続いている。

その菅原さんが十一月に郷里を離れ、長野県佐久市の妹さんと同居することになった。国労本部勤務中に住していた千葉県船橋市で平和運動、社会主義運動に邁進していた画家の村松七郎氏（戦後、岡本太郎氏らと「世紀の会」に参加）が十月に九一歳で亡くなり、十二月二十日千葉県内で「偲ぶ会」を開催することになり、呼びかけ人の一人として菅原さんが来ることになった。

村松氏と菅原さんらが船橋で始めた「原爆の絵展」は、今や千葉県では十二市町村二六ヶ所にまで増え、全国的にも広がってきた。「偲ぶ会」の前日、病に伏している家内を案じて我が家に来て下さり、一泊し久しぶりに楽しいひと時を過ごすことができた。菅原さんは年齢的にはお姉さん、しかし、私にとっては母親のような存在である。

出会い

菅原さんと初めてお会いしたのは、彼女の記憶にはないようだが、修善寺大会（一九八六年十月九～十日）の後の大会（八七年九月二～五日・九段会館）の会場で社会通信社の滝野さんから紹介されたのであった。

その頃、既に国鉄は分割・民営化され、JR各社に移行していた。「所属組合で差別はしない」「二人も路頭に迷わせない」（一九八五年十一月二五日・第一〇七回臨時国会における参議院国鉄改革特別委員会で政府答弁）は反故にされ、国労組合員ら七六二八名が解雇され、なお、執拗な国労脱退工作が続いていた時期であった。

この大会はまさに解雇撤回闘争の決意を固めようと同時に、国労の闘争宣言を内外

に明らかにする大会であった。

その頃、国労顧問の岩井章氏（元総評事務局長）は自ら会長を務める「国際労働運動研究協会」発行の月刊誌『国際労働運動』誌上で国労支援の意義とともに、支援の在り方について、繰り返し提言していた。具体的には、被解雇者の生活を支え、運動資金確保のための「連帯する会」と行動部隊としての「支援共闘」の必要性であった。

国労は翌年（一九八八年七月二十〇二二日）開催の第五二回定期大会（九段会館）後の十月一日、稲田委員長を本部長、宮坂要書記長を事務局長とする「清算事業団闘争本部」を設置した。私はこの大会後の七月末頃から、岩井氏の提言する「連帯する会構想」について国労本部から助言を求められていた。

私と国労の出会いには新井修一氏が本部青年部長の時、「昭和電工の闘争について話してほしい」と講演を依頼されて以来、全国各地の青年部や各級機関に招かれるようになって、一九八七年四月に全国に被解雇者の収容所ともいうべき「清算事業団雇用対策支所」を自家用車で何度も激励に回っていた。会社勤務時代から各地の地区労や労働組合の学習会に招かれ、北海道は特に年に何回も訪れていた。

国鉄闘争

私は一九八二年三九歳の時、会社を退職し東京の「権利問題研究会」（福田徹代表）専従事務局長に就任した。一九七五年にはじまった昭和電工の不当な強制配転・解雇との闘いは、会社の攻撃は止むことなく、被解雇者（原告団）は一四名まで増え、ついに工場閉鎖が提案されるに到った。こんな中、私は三年の東京専従生活を辞職し、一九八五年から闘争の現地・千葉に戻り昭和電工の現地闘争、物販や全国オルグに明け暮れていた。元もと昭和電工では肉体労働者であったから、生活は土木作業をやっても何とかなる、と貧乏を苦にしたことはない。

一九八八年夏、国労から具体的に「連帯する会」の結成の準備と結成後の事務局長就任を要請され、この機会に「昭電闘争」を全国的に広めることを密かに胸に秘め、「連帯する会」の運動を引き受けることになった。四四歳の時だった。

連日打ち合わせが重ねられた。私は事務局長を引き受けるにあたって、当時の宮坂要書記長（清算事業団闘争本部・事務局長）に、書記局の人から総務・財政を担ってくれる人、会報の編集・オルグのできる人を配置してほしい、とお願ひし、菅原須摩子さんと樋口俊土さん（後に社会党の分裂時、新社会党の結党とともに国労書記局を退職し新社会党本部機関紙担当に就任）の二人が一緒に運動することになった。「連帯する会」は一九八八年一月一日に正式発足した。事務局員は一時七〇八名に増員された。

毎日、小島忠夫中執を中心に朝八時から事務局会議を開催して意志統一し、その日の行動を決めていた。その頃、我が家は快速電車がなく千葉の田舎なので朝六時に家を出る毎日であったが、辛いと思ったことはなかった。

菅原さんは、組合員が減少する状態の中で本部職員も減員する必要性を自ら痛感し、定年前に自主的に退職したのである。

また、国労の物販は全国の清算事業団・闘争団が自主的にやっていたので、支援組

合から物販体制の一元化を図ってほしい、との要請が連日のように寄せられ「国労生活事業センター」（株式会社アルバ）を設立し、物販事業の統一を果たした。この時に、社長は国労の委員長が就任し、私が初代の専務として、事業の進め方、安定的発展のため尽力したが、その時も退職していた菅原さんにお手伝いをして頂いた。

近況

旭川に帰郷した菅原さんは、高齢の母親のお世話をしながら、党活動はもとより、I女性会議、憲法活かす会、町会、民生委員、障害者運動で手話の勉強、お茶会の開催など年齢を感じさせないほどの活動に邁進していた。

その頃の私は、夫婦共に北海道出身ということで、毎年数回、妹や友人・知人を伴って北海道旅行に行っていた。礼文島、利尻島、天売島、焼尻島、奥尻島など北海道在住の人でも、あまり訪れない所も何度となく、案内人として旅した。そのたびに、旭川の菅原さんにはお世話になり、集団で泊めていただいたこともある。また、繁華街に出て、一杯飲むこともたびたびだった。

「国労はいったいどうなっているのよ」「公ちゃんを大事にしなさいよ」と家内のことも常に気遣っていた。二年半ほど前（二〇一三年）、私たちは六人で、札幌の「よさこいソーラン」を見に行った。家内の公子が二日目の宿泊地定山溪温泉のホテルで倒れ、札幌市内の病院に緊急搬送され、札幌で三週間の入院、その後、地元・千葉の病院に転院したが、札幌の病院まで見舞いに来て頂いた。

それ以来、私の老々介護がつづいているが、度々心配して電話をくれたり、上京の際には立ち寄って頂き、激励を受けてきた。まさに、私にとっては、母親のような存在であるが、なかなかいまだ親孝行出来ないでいる。

長野は学習会で度々出かけるので、今後は会える機会が増えるだろうと楽しみにしている。そして、新天地では活動はほどほどにして、いつまでも健康で暮らしてほしいと願っている。（千葉・山下 俊幸）

イスラム国（IS）消滅、中東世界の次は？

怪物そして難民

世界に怪物が現れた。イスラム国（IS）、アルカイダという怪物である。ふるい、そして新しい帝国主義の強国は、この怪物を退治しようと「反テロ」という同盟を結んでいる。オバマ―NATO―湾岸諸国、ロシア―イラン―シリア。

怪物を生み出したのはだれか。米国である、ブッシュが「イスラム主義せん滅」を口実におこなったアフガニスタン、イラクへの侵略戦争である。米国は戦後処理に失敗した。アフガニスタン、イラクは内戦状態となった。米国、かいらい政権が統治できたのは権力の中枢機関がある首都圏、それも官庁地区だけ。地方は権力の支配がおよばない無法地帯となった。

内戦は今も続く、地方の貧しい民は親を失い子をなくし、戦火で家や田畑を失い、かんがい設備が破壊されることでさらに貧しくなる。米国からの軍事・資金援助は権

力闘争、腐敗を拡大、反米感情、権力者への増悪はいや増すばかり。こうして民族、部族、地方軍閥が地方に割拠し争う。宗派対立が利用される。そこに武装勢力が入り込む。

中東の内戦は二〇一一年はじめチュニジア、エジプト、バーレーン、イエメン、スーダン、シリアにおける「反独裁」革命、闘争を経さらに激しくなった。米国、サウジアラビアはエジプト、リビア、バーレーン、イエメン、シリアに干渉。エジプトでは反革命、バーレーンはサウジアラビアの属国化、チュニジアは穏健派とされるムスリム同胞団が権力を失い、リビア、イエメン、シリアでは内戦が激化。国民は「生命の安全」を求め、「生命の危険」をかけ、EU諸国をめざす。「中東の戦争」がEUに波及した。いわゆる難民問題である。

錯綜

今の焦点はアサド一族の独裁政治が二十年つづくシリアである。シリアは西は地中海に面しレバノンと、北はトルコ、東はイラク、ヨルダンと国境を接する。トルコとの国境は八〇〇キロにもなる。

シリア内戦は二〇一一年、政府軍と政府軍を離脱した「自由シリア軍」との間で始まった。アサド政権は権力に逆らう個人、勢力をてつて的に弾圧した。彼らはトルコに逃れ、その地で反政府組織シリア国民評議会をつくる。米国を中心とする「反テロ連合」も有志連合はアサド壊滅のため反政府組織に金、武器、さらに特務要員を送りこむ。アサドは首都ダマスカス、地中海沿岸部諸都市に防衛線を敷いた。全国が無法地帯となった。そこに「反政府」を旗印に、イスラム主義武装勢力が流れこんだ。アルカイダ系でスンニー派とされるシリア人からなるヌスラ戦線、イスラム戦線、さまざまな反政府民兵集団である。彼らはアサドと闘う。隣国ヨルダンに拠点をもつ親アサド・シリア派組織ヒズボラが参戦する。ヒズボラは反体制派と闘かう。「反体制」派は主導権めざし争い合う。

シリアはトルコ、イラクと国境を接する。そこにクルド人が住む。クルド人はアサドの弾圧に抗し、反アサドで闘かう。トルコ国内には一千万人のクルド人が住まい、クルド自治政府をもつ。クルド人はトルコからの独立をめざす勢力と親トルコ勢力に分裂している。「ジハード主義者」（過激派）が国境からシリア、イラクに侵入する。IS拡大の背景である。

トルコ

トルコは中東でもっとも近代化し安定した国家だ。権力はイスラム主義政党の公正発展党（AKP）が握る。NATOに加盟し、「冷戦」時代は、対ソ連の橋頭堡としてあった。今は有志連合、対IS同盟の最前線にある。米国は反アサド、対IS参戦を求めた。トルコは拒否、参戦はアンカラ事件（一五年十月一日）のあとである。

トルコは国内に①IS流入とテロ、②クルド人問題、③シリア難民流入の三つの不安を抱える。トルコ国境ではISとクルド自治政府が闘かう、国内にはトルコからの独立をめざすクルド労働者党（PKK）との長い抗争がある。トルコの思惑は、IS

との戦争はクルド問題を複雑にし、国の安定を揺るがす、クルド問題を I S に片付けさせたい。

トルコはアサド辞任を求める。エルドアンは「国家存続の危機」の時と、①シリア国境―シリア領内―に援衝地帯をつくり、②難民流入には国連 P K O の管理を構想した。シリアはこれを①内政干渉、②ゲリラを送り込むのが狙いと拒否する。トルコが出兵しなかった背景である。こんな安保政策を変え、参戦したのがアンカラ事件である。参戦はすぐ反作用をもたらした。トルコからの独立をめざす勢力と、そうでない勢力の抗争の激化である。

プーチンとオバマ

シリア内戦を複雑にするのが、国際関係だ。アサドを支援するのがロシアとイラン。メディアは I S がエジプト領内から飛び立ったロシア旅客機を墜落したと伝える。戦時下の謀報合戦であるから嘘か真かは闇の中だ。これを契機にロシアが参戦した。

ロシアはアサド存続を目的に闘かう。有志連合はアサド、I S 壊滅を目的に闘かう、ロシアにとって反アサド勢力はすべて敵だ。有志連合にとって I S としてアサドが敵だ。ロシアはなぜシリア内戦に干渉したのか。

ロシアは NATO 東進に脅威する。地中海への出口を求めクリミアを占領した。中東への橋頭堡はシリアである。「冷戦」時代のアラブの国ぐにの政権党だったアラブ社会党はソ連と深いつながりを持ち王制打倒、共和国をつくった。そのつながりを今ももつのはシリアだけだ。ロシアはシリアを必要とするし、シリアはロシアがシリアを必要としていることを知っている。ロシア参戦の背景である。

シリア和平協議

ロシアはアサドの存命を望む。有志連合が I S、アサドせん滅を目的とした一四年八月からの I S 空爆は、まったく効果を上げていない、I S は有志連合が支援するアサド「反体制」勢力の内部抗争で、勢力を温存できた。ロシアはアサド延命に I S、反アサド勢力せん滅をめざす。

戦争はさらに激しくなる。市民・国民の被害はふえる。有志連合はロシアに主導権をとられては困ると、I S 支配地域を米国、トルコ、仏、英国、アラブ連合軍が空から攻める。空から改めて一年半になるのに、I S はイラク、シリアで勢力を保つばかりか、E U、中東、東アフリカでテロをくり返す。世界は生き苦しくなる一方だ。

I S 壊滅は時間の問題。ふるい、そして帝国主義国すべてが I S を敵とする。ロシアは違う。アサド存続に力を注ぐ、ロシア参戦でアサドが盛り返した。シリアで、アサドが主導権をとった。それが、シリアをめぐる和平交渉だ。メディアはいろいろ伝える。どうなるかはこれからの戦況しだいとなる。

アサドがシリアを支配する戦況になれば、シリア・ロシア・イラン流に。有志国になれば逆である。メディアの報道を鵜呑みにするのではなく、情報を集め、どう判断するかが問われる。今の情勢がこれである。

混乱のなか、シリア内戦終結をめざす多国間協議が始まった。中心は米国オバマと

ロシアのプーチン。すでに述べたが、米国はアサド後を考え、ロシアはアサド存続を考える。話し合いはまとまらない。シリア内戦のゆくえが決める。劣勢だったアサドはロシアの参戦で盛り返しているという。アサドが権力を維持すれば、NATO軍の負けとなる。この時、中東でのロシアの影響力は大きくなる。

シリア内戦停止の枠組み作成後の、もつとも大きな課題は難民問題だ。人口二千二百万のシリアの難民は国外四百万、国内一千万といわれる。この他、アフガン、イラク、リビア、エジプト等からのヨーロッパに「生命を賭け」て脱出した民衆は一千万を超えている。戦争終結は難民発生をとめる。帰還問題が始まる。(滝野 忠)

(注) 中東の政治、戦争は激しく動いています。一月三日にはサウジがイランと国交を断絶しました。社会通信はたびたび中東問題を論じてきました。『第四次世界大戦の可能性も 中東をめぐる動きについて(一)』(No.110三号、一五年十一月一日付)、『宗派闘争は本当か イスラム世界とアラブ世界(二)』(No.110五号、一五年十二月一日付)を参照ください。

◇ 読者からのおたより ◇

初春二〇一六年はじめに 「新春や 万感包み 時刻む」 暗くなれば光もよく見えるようになり
ます。ご活躍を 今年もよろしくお願いいたします。(松江市・濱崎 忠晃)

参院選で勝つ 戦後七十年は安倍政治により最悪の年でもあり、護憲の闘いが新たな息吹を感じさせる年でもありました。今年、戦争法を実行させないために、参院選で山形は舟山さんを勝利させなければなりません。「アベ政治を許さない」行動を一步、百歩、千歩、万歩と進めましょう。

(山形・東海林 和夫)

不「安」政治 「戦後七〇年」の二〇一五年は、私が六三年の人生で経験したことのない不「安」な年でした。安全・安心の「安」ではなく安倍政治、安保法など不「安」を思いおこします。稼業(家業)の農業は政治家と違って嘘はつきません。田畑で語りかけたお通り正直に育ってくれています。その稼業も国会決議違反のTPP大筋合意で不「安」倍増です。不「安」政治から脱却が今年の課題です。(長野県飯綱町・山浦隆芳)

三分の二阻止! 安保法(戦争法)反対の闘いは、八月三〇日の「国会」二万人、全国一〇〇万人に本当に多くの人がそれぞれの意志で戦争をする国にしてはならないと「廃案」を訴えました。九月一九日に強行採決されても「廃止」の闘いが中央・地域で取組まれています。いま安倍政権は、同日選挙も想定される、一六年夏の参院選挙メアテの農業への補助金、低年金者等への給付金、さらなる金融緩和等で安倍政権の生命線である「高い内閣支持率と株価を維持」し改憲発議に必要な参院議席の三分の二を確保しようとしています。何としても三分の二議席を阻止するために安保法(戦争法)と一緒に闘った仲間と共に、そして昨年急逝した山城保男さんの遺志を引き継ぎ闘う決意です。(横浜市・特定社会保険労務士・行政書士 塚本 鉄男)

大群の鶴 『風が吹けば桶屋が儲かる』誰が儲かってんの『3本の矢』「儲かりまっか」「ポチポチでんあ」喜んでよいのやら 『国家、国民』は(企業)の内部留保金300兆円超) 我が家には「内部留保金」はありませんが、単純作業を仲良く(?)続けています。「通信」を見て、北海道の農業を見学したいです。年末に鹿児島県出水市へ行き、大群の鶴に家族一同感動しました。(大分県豊後大野市・佐藤 憲一)

すばらしい シールズのおかげで政治の季節(とき)がやってきた。岡山の駅前では毎月のように集会とデモが行われています。首都東京では、国会前がラップ調の音楽と呼びかけで、これも毎月のように人の波であふれているそうです。一〇〇〇人委員会の会報によると一月四日早々から国会前で「抗議要請行動」が予定されているとのこと。七月の参院選挙を控えて、政治家は何をやっているのか、おとな達は何をやってきたのか、若者よ・仲間よ、政治に傍観者であってはいけないと呼びかけている。すばらしいことだ。地域で「週刊金曜日」読者会を継続しているが、新しい参加者もあり、レポーターを買って出る勇士も増えている。一生学習、生涯勉強の毎日が楽しい。新しい人と出会えるのも読書会の宝です。(岡山市・堀井 進)

天王山 ああ安倍首相の得意げな顔や甲高い声をテレビで見聞きするたびに虫唾が走るのですが、

なぜか高い支持率に支えられた彼が長期政権を夢想し、軍事大国化・「戦争する国」実現を目指していることは疑いありません。であるなら今年七月の参議院選挙が天王山の闘いです。日本の戦後民主勢力が丸となってこれを阻止すること―働くものの生活と権利、日本の平和と民主主義を守り抜くために、すべての労働組合、民主政治勢力が戦いの共同戦線に、一日も早く団結することを心から願っています。

希望 昨年ビデオプレスは、『自然にやさしく人にやさしく』（清掃労働現場の記録）『メトロレディーブルース3』や長編ドキュメンタリー『裁判所前の男』をつくりました。『裁判所前の男』は司法の暗部に迫ったもので好評、今年から本格的に自主上映をします。また二〇一五年夏は、戦争法案をめぐる国会前取材を続け、三分の記録『民主主義ってこれだ！』二〇一五夏・戦争法案ドキュメント『鉄柵をこえて』（改題）にまとめました。法案は通りましたが、若者の登場に希望も生まれました。また、レイバーネットTVの活動を通して「戦争する国」に向かう安倍政権に小さいながら声をあげてきたところです。戦争する国にさせてたまるか！ ことしも民衆のネットワーキングに力を入れていきます。

個と組織 退職後八年が経過しました。「前へ出る人」から「支える人」に立ち位置を変えての生活です。それでも『個と組織』の壁に悩まされます。組織が個を制約しているケースの多さに改めて、基本的人権や「心の自由」の難しさを感じております。衣食住が出来ているが故での社会活動であり、その事の自覚も大切です。「他人の為ではなく、自身の為」―「生き甲斐探し」の人生でもあります。ユビー記事・同じ投稿者が気になります。

元氣だし 「めでたさも中位なりおらが春」と一茶は言いましたが、次々と繰り出されるあべ政治の恐怖の中で新年を迎え、めでたさは中どころではありません。平和という名のもとに、戦争への道をひた走るあべ内閣を、何としてもやめさせたい。真実を見きわめ、良く聞いて、発言する年に！ 元氣を出して共に頑張りましょう！ 昨年十一月、文化琴・ハンドベル・オカリナの皆さんとウィーンの楽友協会演奏する機会に恵まれ、文化交流をしてみました。（長野県須坂市・碓井智似子）**酒を酌み交わす石仏** 信州の鎌倉・別所温泉の近くの古道を歩いていたら酒を酌み交わしている石仏に出会った。ふたりは室町時代から呑みつづけているらしい。「グイッと呑めよ」「まあまあ、陽はまだ高い」楽しい会話が聞こえてきそうです。上杉と武田の戦いの話？ あるいは琉球の基地問題かな？ 殿のバラまき外交への苦言かも。

農業・過疎の町 昨年は、国の『TPP』推進により農業のまち過疎の町深川にとつて、逆風。更に『平和憲法』が蹂躪され『福祉』が後退しています。本年も逆境に掉さし「住んでいて良かった」と言われる深川の街へ、微力ながら奮闘して参ります。本年も逆境に掉さし「住んでいて良かった」

選挙三昧 五月二日から年金生活者になりました。一六年間にわたり大変お世話になりました。本当にありがとうございます。共同のテーブル方式から立候補した市民派のいしづき幸子さんに無事パトンを引き継ぐことができました。上越市議会議員選挙（四月二十四日投票）に初めて立候補する牧田正樹さんの手伝いに毎週二泊三日で上越に通っています。そして、七月の参議院新潟選挙区に野党統一候補擁立にむけ努力しています。今年も相変わらず選挙三昧です。二つの選挙に何としても勝つために、皆様の力をお貸しください。

岩を通せた 創刊号以前からの読者です。多忙の中、たまに読ませて頂いております。昨年の統一地方選挙において、銚子市の市議会議員に初当選しました。無所属として頑張っております。五六歳で中途退職して立候補、落選。二回目もダメ、三回目は断念。二年前の補選で落選。保守的な土壌の中で、親戚ゼロ、同級生ゼロ、地元推薦なし、組織なしの中で、無茶だと言われましたが、十年以上のボランティア活動を続け、「岩をも通す信念だ」と言われましたが、見事岩をとおすことができました。世界は変わりましたが、初心忘るべからずで、階級意識を失うことなく頑張ります。

「慰安婦問題」 本日（二〇一五年一月二十八日）、岸田外相と韓国外相が「慰安婦問題」で会談するというようですが、被害者の声を聞かないで「解決」など、有り得ないことです。

そもそも、日本政府の言葉は「妥結」を目指す！？ 「解決」を目指すんじゃないかと、つて：以下、26日の挺対協報道資料ですが、あまり、目にしないので、転載します。

既に、ご存じの方には申し訳ありません。日本軍性奴隷被害者のお一人、金福董ハルモニの言葉が末尾にあります。「私たちがお金欲しくてこんな長い間こうしてきたと思ってるのかね？」という声を、日本政府は、よろよろ、肝に銘ずるべきでしょう。この外相会談では、大失敗した国民基金の愚を再現することにならないように祈るばかりです。

（千葉我孫子市・増田都子）